



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

謹賀新年

おめでたい新年を迎えたから、おめでたい話をしておこう。

ぼだいせんな

ところで菩提僊那（ボーディセーナ）という人物をご存知だろうか。736年に印度から日本にやってきた。南天竺からヒマラヤを越えて中国にやってきたと云われるが、海路ということも考えられる。さて、「南天竺」といっても、インドのどの辺りか定かではない。ウィキペディアによると、現南インドのタミル州出身とされているが、なんとなく怪しい。それを証明する資料があるのだろうか。確かな論拠もないなら、「南天竺」の範疇に入るオリッサ（現オディシャ州）出身の可能性だってある、とわが輩なら言う。

菩提僊那は奈良の大安寺に止住し、16年後に東大寺大仏殿の開眼供養法会で導師を務めた。奈良・富雄の靈山寺（りょうぜんじ）で760年に没した。富雄の山あいの風景が、ブッダが坐していたラージギルの靈鷲山（りょうじゅせん）に似ているというので、終焉の地に選ばれたとされている。同寺には供養塔があり発掘してみたが、遺骨らしきものはでなかった。この話が本当なら、菩提僊那は靈鷲山近くのナーランダー大学で学んだことがあると想像できる。

印度から中国、そして日本に導いたエネルギーとは、一体何であったのだろうか。今日近くなったとはいえ、まだ少し遠いインドを思い浮かべると感嘆するしかない。僧衣一枚、裸足で渡来したのか。旅の費用、宿や食事はどうしたのか。王朝、権力者が庇護したが、そもそもことばが通じたのか。言語不通なのに、権力者を惹きつけたものとは何か。権力者は何故に庇護したのか。

キーワードは「仏教」あるいは「仏教学」だと学者は言うかもしれないが、わが輩はそれだけでは満足しない。われわれ一般人がもつ冒険心、未知なるものへの探究心・エネルギーを付け加えたい。

この度、インド政府より三体の菩提僊那像が大安寺（南都七大寺・現高野山真言宗）、靈山寺（法相宗・現真言宗）に寄贈された。あとの一体は香川県小豆島・本覚寺（高野山真言宗）に寄贈された。同じ真言宗系として薄い人的関係はあるものの、歴史的に菩提僊那とは何の関係もない。

ならば、どのようなご縁でこの度の寄贈となったのか、興味ある読者諸氏がいることは想像に難くない。このご縁を結んだ張本人こそ、「この大魔王だ！」といっても過言ではない。すべての出発点は「オディシャ州」にある。本覚寺の現住職は高野山大学を卒業して仏跡巡礼の旅にでた。だいたいの方がインド仏跡巡拝するのは、四大仏跡（ブッダ生誕の聖地、悟りを得た聖地、初めて仏法を説いた聖地、涅槃に入られた聖地）、または祇園精舎、靈鷲山などを加えた八大仏跡が定例である。

ところが住職は因縁に導かれて不殺生・非暴力の聖地ダウリ丘（オディシャ州）に参詣することになった。八大仏跡も重要な聖地だが、ダウリ丘は「大乘仏教」において見過ごせない聖地である。なぜなら、八大仏跡のベクトルは「追慕」にむかっているが、ダウリ丘のベクトルは現在と未来の〈不殺生〉に向かっているからである。

前3世紀にアショカ王は、オリッサのカリングの戦いで十万人を虐殺したと云われている。ダウリ丘で指揮を執っていたとき、高僧ウパグプタが現れ王にダルマ（法）を説いた。王は深く罪を悔いて仏教に改宗したと伝えられている。前述のように、ブッダとは直接的な関係はないが、ブッダの慈悲、つまり〈個人的な慈悲〉から〈社会的慈悲〉に舵をきった歴史的な〈現場〉といえる。

丘の麓には不殺生や人生軌範を刻んだ大きな岩がある。また丘の上には、アショカ王柱と思われる謎の石柱があった。

本覚寺住職はその歴史に感動して自坊に柱頭を建立することを決意した。大仏師ラグナート・モハパートラーが制作することになった。やがて完成仕上げのために大仏師一家が小豆島にやってきたが、一向に働く気配がなかった。困った施工業者がわが輩にヘルプを依頼してきた。はい、はいと軽く受けたものの大仏師に会ったこともなかった。もちろんわが輩には人心掌握の術も、大魔術もなかった。「小豆島巡りもいいかな・・・」などと軽い気持ちでフェリーに乗った。ただオディシャの故郷話を二時間ほどして引き上げた。（そうそう、寒霞溪あたりで小豆島うどんをご馳走にもなった）

翌日施工業者から「作業をりはじめた！」と喜びの電話があった。ウソだろう。お世辞だろう、と聞き流していたが、柱頭除幕式（1996年）に招待していただいた。この祝典を朝日の記者が記事にした。その32年前の記事を、インド総領事（2021赴任、オディシャ出身）に提出したところ、それが良縁となって、この度菩提僊那像が寄贈された。すべてがオディシャ州から始まった。実におめでたい話である。

本覚寺は失礼ながら大安寺や靈山寺のような大寺ではない。しかし、珍しく日印友好の寺院であることに違いない。アショカ王柱頭に先立って、人毛を十万髪集めて描いた観音図（一髪観音図）がある。図像は、アジャンター仏教石窟寺院の観音菩薩の模写をした杉本哲郎画伯である。十万本の髪の毛には、ネルー首相のものも含まれている。タゴールの毛髪も含まれているらしい。おそらく読者諸氏も「本当かな？」と疑いの念をもつかと思われるので、そのエピソードを紹介しておこう。

杉本画伯の渡印前に、画伯ご子息一郎は先々代住職玄浄から、「頭髪を少し頂けないか」とネルーに問うてくれ、と頼まれていた。若き一郎（21）は、初対面にもかかわらず臆することなくネルーに訊ねた。画伯たちは失礼の段に戸惑ったが、ネルーは少し考えて、娘のインディラ・ガンディーに鏡とハサミをもって来るように命じた。インディラが数本髪をきり白紙に包み、ネルーから直接手渡された。のちに画伯と一郎が玄浄に手渡した。（孫の杉本太郎氏から直接に聞いた）

ついでながら、小豆島というと「咳をしても一人」の独居の俳人尾崎放哉（ほうさい）が知られている。放哉と玄浄も俳句を通じて交流があった。また放哉の師萩原井泉水（おぎわらせいせんすい）はたびたび本覚寺を訪れていた。

冬の寒さで咳をすることたびたびの大魔王だが、一人ではない。わが輩の四方には、心暖かき人がとりまき、今年も心妨げられることがない。「ありがたくも、めでたい空咳ひとつ」（大魔王句）